報　告

# 第２３回ミニ教研（２０１８）in 広島
# ミニ教研 今年は広島で開催

ミニ教研事務局・山形県鶴岡市　小泉 信三

第 23 回ミニ教研（2018）in 広島を、8 月 6 日から 8 日にかけて被爆地ヒロシマで開催しました。ミニ教研の重要な目標の一つが「複眼的に『ものごと』を見る」ことであり、被爆地・被害の歴史と中国人や朝鮮人の強制連行・強制労働の加害の歴史の両方の事実を知ることにあり、原爆投下日と強制連行のフィールドワークの実施は必須のものでした。

原爆被爆については、ヒロシマ市内のフィールドワークや原爆平和記念資料館、被爆者の体験談で学び、中国人の強制連行については、「安野発電所フィールドワーク」で学びました。川原さんの案内で充実したフィールドワークになり、北海道から九州までの参加者が貴重な体験をし、感謝・感謝で帰宅しました。本当にありがとうございました。

## ミニ教研とは

多くの生物が大量絶滅の危機にあり、これをもたらせている大量生産大量消費の科学技術文明を転換しない限り地球の持続が危ぶまれると、1972 年「人間環境宣言」が採択され、その後多くの場で「環境保全か経済成長か」という論議がされ、1992 年ブラジルで国連地球環境サミットが開催され、「環境と開発について地球規模でパートナーシップを結ぶ」ことが合意され「持続可能な開発」「気候変動枠組条約」「生物多様性条約」等が確認されました。

しかし、日教組全国教研理科分科会においては、世界的な文明の転換へのながれに抗して日本が経済成長を優先し、学校教育・理科教育も相変わらず経済界の要請に応え世界的なながれに対応できないことに危機感をもち理科分科会のあり方について検討をし、全国教研だけでは論議を深めるのには時間的な面で一定の制約を受けざるを得ないので、全国教研とは別にミニ教研（出前教研）を開催し、十分に論議を深めることを提起し、1996 年第 1 回開催し、本年 8 月の広島集会まで毎年開催しています。

最初は科学技術の正と負からはじまり、基本的な問題である「何のために理科教育を学ぶのか、理科教育あり方は」等の論議を重ね、ミニ教研と全国教研の繰り返しにより論議の争点が整理され、現在の討議の柱が「1．私たちは今、地域でどう生きるのか　2．地球市民としてどう生きるのか　3．ソフトパス・循環型の実現　4．総括討論・生きた授業」となり、自分たちの住んでいる足元から、地球そして未来まで視点にいれ論議ができるようになり、根本的な「理科は何のために学ぶのか」という問いに答えるものになってきています。

一方、ミニ教研の開催地は、戦後の生活単元学習の実践地山形、日本の高度経済成長期を支えた陰で数多の公害を発生させた水俣病発祥地である熊本県や新潟県、日本の近代化と戦争参加をエネルギー面から支えた産炭地福岡、近代化の犠牲として植民地支配されたアイヌ民族の歴史が残る北海道、チェルノブイリをしのぐ炉心溶融という過酷事故を引き起こした福島第一原発が立地する福島、在日米軍の集中と土地の強制収容が未だに続き植民地的支配に苦慮する沖縄、日本の近代化と公害の爪あとが残る足尾、戦争への緊張感のある横須賀、被爆地ナガサキ・ヒロシマと北海道から沖縄まで開催しました。多くの地にも日本の朝鮮・中国からの強制連行、強制労働の歴史があり、戦争の悲惨さと日本の侵略を反省する集まりとなり、フールドワークは歴史の事実を学ぶ旅となっています。

## 安野発電所を訪れて

「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」の取り組みに敬意を表します。1990 年初め秋田県の「花岡事件」から始め、広島県内の「中国人

〔12 頁の右下へ続く ⇒ 〕

感　想

## 第２３回ミニ教研（２０１８）in広島
# ８月８日「安野フィールドワーク」に参加して

東京都・くらしをつくる会　山口 雪子

西松建設との和解で建てられた「安野　中国人受難之碑」には360名の方々の名が刻まれ、確かにそれだけの人々が苦難を味わったのだ、としっかりと認識できました。

善福寺での昼食時に流されたDVD「50年目の叫び」で、当時の労働と生活の生の声を聴いたおかげで、午後の収容所跡を生々しく見学することができました。善福寺の藤井住職さんからの中国訪問のお話も交流の様子がよく分かりました。

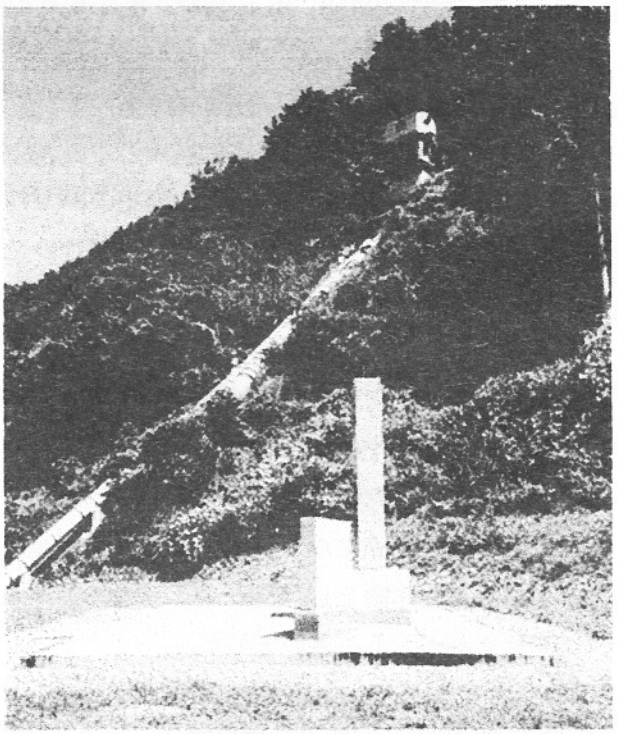
午後からは、いまはただ田んぼになっている津浪収容所跡、もう杉林になっている香草収容所跡を見たあと、土居取水口を訪ねました。ただただ往時を想像するばかりです。

当時どのようだったか、川原さんからの説明はとても分かりやすく、強制連行させられた人々の苦難を知ることができました。

今回の見学で、戦争は決して起こしてはならないこと、そして、このようなことを二度と起こしてはならないとの思いを新たにしました。中国人だけでなく朝鮮人もたくさん働いていたのですが、日本がこのようによその国から強制的に労働力となる人々を連れてきたことに強い怒りを感じます。そして、川原さんたちの努力により、このような日本の強制連行の事実が明らかにされ、多くの人々が知ることができるようになったことは素晴らしいことと思います。今回得た知識をまわりの人たちに知らせていきたいと心から思いました。

今回の広島フィールドワークの参加で得たことを、これからの生き方に生かしていきたいと思います。

川原さん、本当にありがとうございました。



安野発電所と中国人受難の碑

〔 ⇒ 11頁の右下より続く〕

強制連行の歴史」を知る。しかし、安野を訪ねても「強制連行」の事実を掘りこすことはできず、その後、「強制連行された安野の生存者の手記」を入手し、中国河北大学に生存者・遺族の追跡調査の実施、河北大学の報告に基づいた「訪中しての聞き取り」、安野での聞き取り、生存者・遺族を広島に招請、証言集会の開催、裁判のたたかい、裁判以外の活動、和解と和解事業、「安野・中国人強制連行調査」を25年行い、和解事業終結後も草の根交流を継続しています。政府同士がいがみあっていても、市民同士は理解できるようになるのです。このような地道な努力が世界の平和に寄与することは間違いありません。自分の足元ももう一度見直します。